

都市の時代

榎並公雄著

三一書房 新書版 293頁

320円

日常生活からのアプローチ

京の西のはずれ、嵐山の近くに小督局の物語で名高い嵯峨野がある。ここに京都で最初の公団住宅が建った。当初は竹やぶも野原も空地も公団住宅の周囲にあり、夏になるとドサまわりの芝居小屋がたつほどだったが、4～5年のうちに周囲はほとんど家で埋まり、やがて30軒ばかりの商店街もできた。こうした嵯峨野の景観の変貌につれて、いつしか遊山電車の感がつよかった嵐山線も、通勤電車へとその性格をかえていく。

都市化の波は、古都京都の郊外にも容赦なくおしよせてきた。その京の嵯峨野に住み、京を愛する著者が、「都市でくらしたい一人の市民として、こうありたいというねがいを、断章的に書きつづった」のが本書で、暮しのなかからみた都市論である。したがって、テーマのとりあげ方も話のすすめ方も身近かなものを中心にしていて、きわめてしたしみやすく、わかりや

すい。それに余談やら楽しいおしゃべりが随所にあって、婦人にもしたしめる平明な都市論となっている。

全体の構成は、都市の時代、昔の町と現代の都市、都心、都市の交通、土地と住宅、都市の産業、保全と開発、都市生活と市民、自治体の経営、都市の未来の10章より成っている。一応総花的であるが、すべての章にわたって都市をいかに人間に引きつけるか、人間の住みやすい都市とはどんなものであるかという著者のヒューマンな心が一貫して流れている。すなわち、ぶらぶら歩きのできる広場を高く評価する一方、歩車分離の道路を、人間が自動車に飼いならされた本末てん倒のものとして非難するなど、その好例といえよう。こうした市民本位の立場から、「都市生活と市民」、「自治体の経営」の章などはかなり説得力をもったものとなっている。また、団地を子供コミュニティと規定する切れ味のよさやくらしのサイクル15年周期説による住宅問題解決の提案など、独創性のある見解も多く、本書の大きな魅力となっている。ただ一・二の疑問点がないわけではない。その一つは、都市化とくに工業化とその対応策についての認識についてである。これは京都と横浜の相違かもし

れない。いま一つは、生活から都市にちかづく「身辺雑事主義」の方法論上の問題である。啓蒙的な役割や市民運動の原理としての意義は認めるが一そして都市を考える上での原点になるとは考えられるが一都市が巨大化し、都市問題が一筋なわで解決できにくくなった今日はたしてどこまで有効か、やはり疑問としておこう。

類書の中では、やや異色の都市論である。<M. I.>

あとがき

今日ほど都市の緑化がつよい世論として、要請されている時代はないでしょう。とくに、大都市の緑はあまりも不足しすぎています。

本市では、大通り公園構想をはじめ、円海山地域の近郊緑地保全計画およびフランス山周辺の緑地整備など、市民のいこいの場としての緑化事業計画を着々とすすめています。そこで今回は特集として「都市と緑」をとりあげ、関係者の方々にご執筆いただきました。

これらの論文は、こんごの緑化推進をはかる上で、貴重な指針になるものと期待されます。暑いさなかに、ご執筆下さった方々に、厚くお礼申し上げます。

<N>

調査季報

22

1969年8月15日

編集・発行——横浜市企画調整室

横浜市中区港町1-1

印刷——有限会社 宮村印刷所

横浜市南区永楽町2-22